

# 小1プロブレム対策を考える6 ～保護者サポーターから見たS市すこやかプラン6～

高木 友子<sup>a</sup>

<sup>a</sup> 湘北短期大学保育学科

## 【抄録】

幼保小接続は、初期の小1プロブレム対策から教育の接続へと中心が移ってきた。S市A小学校における小1プロブレム対策すこやかプランは導入7年目を迎えた。その内容は試行錯誤して少しずつ変化してきている。2017年度も学年集会とチームティーチングと保護者と6年生のサポーターが採用され1年生の小学校への適応に一定の成果を収めたと同時に、小学校の就学前教育形態への歩み寄りが見られた。また、一部の1年生に姿勢の乱れや授業活動への不参加が見られた。10の姿の提起を受け、保育と子どもの姿は変わり、それを受けて小学校でのスタートカリキュラムもさらに変化するだろう。

## 【キーワード】

幼保小接続 小1プロブレム 10の姿

## 1. 問題

2000年、小学1年生における授業中に立ち歩いたりし、教員の話に集中できず、授業など学級活動が成立しない状態を「小1問題」として、学級経営研究会が指摘した。この現象は「小1プロブレム」(新保、2001)としてよく知られるようになり、2008年に行われた東京学芸大学「小1プロブレム研究推進プロジェクト」(2010)の調査では、全国から調査に協力した自治体の4割以上で小1プロブレムの発生が報告された。

小1プロブレムに関する研究は、当初、その事

象の実態、発生の要因とメカニズム、そして発生の予防に主眼が置かれた。事象としての学級活動の不成立は高学年のような教師への反抗による意識的なものではなく、就学前教育の形態と小学校教育の形態のギャップに対しての児童の不適應であることは、「小1プロブレム」としてこの事象が学級崩壊とは異なる定義づけをされた時点で指摘された。

就学前教育と小学校教育の形態の違いは、対象となる子どもの発達の差異からある程度必然であり、小1プロブレムが注目されるようになった頃に急に生じたものではない。また、著者が一連の報告(高木 2013、2014、2015、2016、2017)で指摘してきた通り、小1プロブレムが注目され、その対策が講じられるようになって以来、2つの

---

<連絡先>

高木 友子 takaki@shohoku.ac.jp

形態のギャップは解消されてはいないものの、その差を小さくするべく、保育施設と小学校の間での保育・教育形態の歩み寄りが試みられ、それが小1プロブレムの予防に効果を発揮していることもあるが、全体としての小1プロブレムの減少は報告されていない。小1プロブレムが目される以前から存在したギャップがなぜ2000年頃からのプロブレムの原因となったのか。ギャップの存在だけで、プロブレムが生じるのではなく、家庭と地域社会の教育力の低下と少子化により、子どもたちの適応力が低下したためと考えられる（東京学芸大学「小1プロブレム研究推進プロジェクト」）。ギャップは古くから存在した。しかし、1990年代までの子ども達は就学までにそのギャップに対応できる適応力を身につけられた。だが、それ以降の子どもたちの中に就学までに適応力を十分に身につけられないものが数を増やした。このことが小1プロブレムの発生の原因であろう。

小1プロブレムが取り上げられ始めてから暫くは、それをいかに予防するか、または生じた事象にいかに対応するかが問題であった。

就学前教育・保育と小学校教育の形態は幼児教育・保育施設と小学校のそれぞれで考えられてきたが、幼稚園教育要領、保育所保育指針では小学校との連携を謳うようになった。

そして近年、小学校新入児の状態を小1プロブレムとして取り上げることはなくなったように見える。それは、小学校新入児の不応状態がなくなったためではなく、不応状態を特別なプロブレムとして扱わず、ギャップがあれば不応が生じることも理であり、それならば、いかにそのギャップを小さく、接続を滑らかにするかということに課題がシフトしたためと考えられる。

しかし、幼保小接続の実践は、いまだ単なる児童の交流に止まるものが多く、単発の交流では効果は見込めないという知見がありながらも、単発

のもの、組織的ではないものが少なくない。なぜなら、条件の整った一部の保育施設と小学校を除き、就学前保育施設と進学先の小学校は1対1対応ではなく、進学のルートは複雑であり、継続的かつ組織的な交流を継続するのが困難な場合が多いからである。自治体などにより、就学前後を通じた接続カリキュラムが作成され、効果をあげた報告数も増えてはいるが、それが全国でどの程度の割合となるかは定かではなく、接続カリキュラムを作成しても、保育施設でのアプローチカリキュラムのみ、小学校でのスタートカリキュラムのみ単独で作成・実施されることがこれまた少なくはないのである（国立教育政策研究所、2017）。

本報告の調査対象であるS市A小学校のすこやかプランは「幼稚園や保育園で小さな集団に慣れてきた新入児に対して、小学校での集団生活や学習形態などに自然にとけ込めるように支援するプラン」ということで2011年より導入された。小学校単独のスタートカリキュラムと言える。筆者はその導入年、新入児保護者としてそのプランの経過を観察し、翌年から6年間保護者サポーターとしてプランに参加した。すこやかプランの定義において小1プロブレムという表現は使われていないが、導入当初、実質的にそれは小1プロブレムの予防を企図したものとみなされた。一連の報告では、すこやかプラン実施2年目から6年目までの成果を伝えた。新入学児童の現状や社会状況、そして2017年に改訂版が告示となった幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を鑑みると、幼保小の接続は一層配慮され、小学校におけるスタートプログラムは継続の方向であろう。しかし、筆者は29年度が保護者サポーター参加最終年度となり、保護者サポーターの視点からの報告は本稿が最終となる。本稿では2017年度A小学校におけるスタートプログラムすこやかプランの内容と成果と、こ

の6年間のすこやかプランの変遷を考察する。

## 2.S市すこやかプランについて

### (1) A小学校

A小学校は都内ターミナル駅より私鉄急行で40分ほどの距離にある人口約70万の政令指定都市S市にある。S市は交通の便のよい首都圏にあるため、人口はやや増加傾向にある。駅周辺は商業地区であり、駅から徒歩15分ほどの商住地区に小学校はある。駅近くからA小学校の周囲まで元より商住地区であったが、すこやかプランが導入されたこの6年間さらにマンションや戸建て住宅の建設が進み、子育て家庭の流入が進んだ。A小学校の児童も6年間ずっと増加し続けている。各学年4～5クラスあり、2017年度新入学年は5クラス約150名、全校児童約900名となった。

### (2) すこやかプラン

すこやかプランはA小学校が2012年度より導入した新入学児童のためのスタートプログラムである。既述の通り、幼稚園・保育所・認定こども園の小さな集団から小学校の大きい集団へと学習形態への適応を援助することを目的とする。

プログラムの具体的な内容は、①毎朝の学年集会の実施（学年担任全員によるチームティーチング）②保護者サポーターと6年生による生活と学習の支援である。学年集会は入学式の翌々日から、サポーターによる支援は入学式翌日から行われた。

プログラム導入当初はこれに担任教諭のローテーションと1か月経過時のクラスの再編が行われていたが、2015年度からは取りやめとなった。

学年集会は、全校集会など特別な行事がある日を除き、プラン実施期間である4月中毎日1時間目に執り行われた。普通教室棟1階にある1年生

の各教室から、別棟の3階にある多目的室に隊列を組んで移動し、学年全体で、ボランティアによる読み聞かせ、教員による訓話と歌唱指導を受ける。児童が大集団での一斉活動に集中して参加することを目的にし、1年生全担任教諭が学年全体の様子を把握する機会にもなる。

プラン実施期間は登校したところから、下校準備まで保護者サポーターによる支援の対象となる。また、朝の支度、給食、清掃などは6年生による支援も行われる。

保護者サポーターは2年生から前年度卒業生までの保護者のボランティアによる。平成29年度は20名ほどの母親たちが参加した。内、前年度のサポーター経験者は筆者を含み、3名であった。

保護者サポーターによる支援は、登校時から始まり、朝の支度、学年集会、授業、給食、清掃、帰りの支度、下校に向けての集合と学校内のすべての時間に行われる、朝の支度と給食と清掃には6年生による支援も加わる。昇降口での誘導（混雑の整理）、ランドセルから机やロッカーへの持ち物の整理、トイレへの移動、学年集会への移動、整列、集会時の活動への参加・集中、教室への移動、授業の準備、学習に必要な行動、体育着への着替え、給食の配膳・下膳、清掃、下校の準備、在住地域ごとの整列といった学校で必要とされる活動を新入生が行えるよう働きかけることと、配膳の手伝いや傷病時の保健室への付き添いなどが支援内容である。

保護者のサポートはボランティアによるので、1年生の在校時間のすべてに必ず保護者サポーターがいるとは限らず、シフトは各人の参加可能な範囲であり、かなり緩やかである。今年度は、朝の身支度は主に6年生に支援されることが多く、保護者サポーターの支援はその後からが中心となった。今年度は学校により、保護者サポーターのシフトを事前に把握しようとする試みも行われ

たが、事前把握は難しく、当日参加できる者が、学年全体の参加状況をチェックしながら、手薄なクラスに入るといふ例年と同様の経過になった。保護者サポーターの参加は均質ではなく、多いときは1クラスに2名の保護者サポーターが入ることもあるが、少ない時間帯はサポーターのいないクラスもあった。

保護者サポーターの控室にはクラスごとに記録ノートが用意されており、支援後、特に配慮を要したことを記録し、教員と保護者サポーターの間で情報を共有した。

また、保護者サポーターは学校から貸与された揃いのエプロンを着用し、サポーターであることを示した。

### 3. 平成 29 年度実施経過

すこやかプランは今年度も入学式の翌日から4月中17日間実施された。前年度までと同様に17日間全ては観察できず、今年度も登校時から学年集会までの時間を中心に7日間を観察した。給食、清掃、下校時の様子は今年度は観察できなかった。

例年はシフトの関係もあり、複数のクラスを観察してきたが、今年度は割合1クラスに集中して観察した。

1日目：入学式翌日。サポート初日。実質的にクラス活動初日である。登校時、昇降口での混乱は少なく、サポートはほとんど必要なかった。朝の学用品の整理は自分ではどうしてよいかかわからず、手が止まってしまう児童が数人見られたが、6年生の働きかけで保護者サポーターの支援までには必要なかった。名札の安全ピンが扱えない児童が数人見られた。

1名の男子が着席の姿勢が保てず、机に伏せたり、椅子から前に滑り落ちたようになりしていた。それに対して保護者サポーターが、姿勢よ

く座ることを求めると応じず、反抗的な態度を示した。

この日はクラス全員の自己紹介が行われた。ほとんどの児童は緊張しながらも自立的に自己紹介を行えたが、3人の女子は自分からは自己紹介できず、担任が隣に付き添って発言を確認しながら一緒に言うことで行った。その間、私語をする児童も2名見られた。その後、簡単なゲームを行い、すぐ下校となった。下校時、居住地別にグループに分かれるとき、教員からの説明が足りず、一部で混乱が生じた。

3日目：登校時、昇降口で靴の履き替えを座り込んで行う新生児が数名あり、人の流れを遮り、一時渋滞した。事前に注意したため、昇降口でランドセルを下ろして荷物を出す児童は今年度、出なかった。しかし、この日は月曜日で、手提げの中から上履きを見つけられず、混乱する児童は1名見られた。朝の学用品の整理は6年生のサポートではほぼ滞りなく行われたが、1名の女子が片付けを行わないまま、廊下をふらふらしていた。集会は2日目となった。隊列を組むのも、多目的室への移動も比較的速やかに行われたが、私語は少々あった。集会時も一部の児童から私語があり、そこから周囲に落ち着きのなさが伝わる様子が見られた。また、列の後ろを中心に各クラス数名三角座りが崩れる児童も見られた。プラン初日に姿勢が崩れた男児にここでも身動きが目立ち、サポーターが姿勢を正すよう求めるとさらに反抗的な態度となった。読み聞かせそのものは皆興味を持って聞いている様子が見られたが、ちゃちゃのような反応を示す児童が例年以上に多く、また、この時点では教員から静かに聞くことや姿勢を正すことの徹底を求めることはなかった。多目的教室退室時、他学級の友人と「バイバイ」を交わし合う児童が多く、騒がしくなったが、それに関しても例年のようには教員からの制止はなかった。

次の活動までの合間にアニメーションDVDを見せる行為が今年度は目立った。前年度までも身体測定で教員が教室に不在時や児童の待機時間が長くなる時など特別なときにDVDの視聴で時間を潰すことがあったが、今年度は前年度までより若干頻度を増しているように見えた。2時間目は校庭で鬼ごっこを行ったが、ルールを守らず、ずるをする児童が5、6人見られた。休み時間が終了したときになかなか教室に戻ろうとしない児童がクラスに3人ほどいた。3時間目は1年生だけでの下校の練習を行った。姿勢の崩れやすい男児ともう一人の男児とがふざけてしまい、活動に真剣に参加できなかった。

4日目:登校時雨天であった。どう行動してよいかわからなかったり、傘を巻き留められなかったりする新入生がそれぞれ数人見られ、働きかけや援助を必要としたが、例年に比べると雨天時の混乱は少なかった。昇降口を共有する3年生で座り込んで靴を履き替え、人の流れを止めてしまう児童が見られた。

6日目:昇降口の混乱はほとんどなかった。朝の学用品の整理は6年生の支援で滞りなく進んだ。健康観察の時間、以前ふざけた2人の男児が遊んで席を離れてしまったり、必要の無いものをいじってしまったりする様子が観察された。この日は校庭にて遊具の使い方の説明が行われた。体育着への着替えはほとんどの児童が問題なく行えたが、ふざけの続く男児が教員の指示を聞かず、指示とは異なる物を用意したり、異なる行動をとってしまったりした。ズボンを後ろ前に着用する女児も見られた。遊具前での説明時、待ち時間が長くなると特定の男児のふざけが見られ、そこから他の児童もふざける様子が観察された。また、全体的に使用を待つ列が乱れてしまった。のぼり棒使用時に一番上まで到達できた児童は学級で1名のみで、これまでにない少なさであった。雲梯

は4名ほど渡りきることができた。

8日目:月曜日のため、登校時の昇降口に若干の混雑と渋滞が見られたが、多くの児童は空いたところを見つけて移動し、靴を履き替えられていたため、例年ほどサポーターによる整理を必要としなかった。一方、この日も通路をふさぎ、座り込んで靴を履き替える3年生が数名いた。教室での学用品の片づけは6年生の支援でほとんどが速やかに行えた。その中で女児1名が名札付けの援助を保護者サポーターに求めた。この児童は安全ピンではなく名札用のクリップを使用していたが、使い方が習得できていない様子であった。学年集会時は各クラスやはり列の後ろで数名ずつ三角座りが崩れていた。また、一部私語が目立つ児童がおり、その私語に影響されてその周辺で私語が広がるという現象が見られた。また、集団活動になかなか参加しようとする男児がここでも参加しようとしなかった。女児が1名、保護者サポーターのそばに着き、離れなかった。集会後は身体測定であったが、待機中、教員もサポーターも教室にいないときに男児が1名教室から抜け出して他所へ行ってしまったことがあった。級友たちが気づき、心配し、教員やサポーターを手伝って探そうとする様子も観察された。

13日目:月曜日のせい、登校時の昇降口は若干混雑した。各組数名の児童が座り込んで靴を履き替えたり、友だち同士でおしゃべりをしたりし、動線をふさぎ、渋滞が生じていた。しかし、混雑の程度としては軽いものでサポートはほとんど必要としなかった。むしろ、3年生の座り込み、おしゃべりによる動線ふさぎの方が顕著であった。男児が1名、昇降口から「学校へ行きたくない。」と訴え、保護者サポーターに付き添われて、教室へ向かうも、支度を取ろうとせず、床にしゃがみこんでしまっていた。全体としては朝の支度は速やかで自立的に行われていた。名札の付け忘れが学

級に数名いた程度であった。集会への移動に児童が1名参加しようと思わず、他の児童の姿が見えなくなってからサポーターに付き添われて移動したが、多目的室でも座ることも、活動に参加することもせず、教室へ戻るときも、他の児童に誘われてもその呼びかけが不快であったのか共に移動しようと思わず、他の児童の姿がなくなってから、サポーターに付き添われて戻った。その際、鼻血のついた名札をサポーターにわざわざ見せるなどの行動が見られた。集会時は集会の隊形を作るも、教員が前方へ移動するとクラスによっては5、6人の三角座りの姿勢が崩れ、また、全体的に私語が広がった。読み聞かせの前に手遊びを1回しても私語が収まらず、この日は2回手遊びを行った。それでも私語は収まらなかった。その中で、口論に発展したり、髪をひっぱったりなどもあり、サポーターの仲裁を必要とした。この日は教員からも手遊びとリズム遊びが行われた。教室へ戻る際、他のクラスの児童と「バイバイ」の挨拶を交わし合い、かなり騒がしくなったが、教員からの制止はなかった。その後の国語の平仮名の書字練習では、これまでも授業課題に参加しないことの多かった男児が補助員に付き添われていた。同じクラスでもう一人男児の立ち歩きと私語が見られ、それに気をとられて授業に集中できない様子の女児も観察された。

16日目：登校時の混雑はなく、朝の支度も見守られるのみで、ペースがゆっくりの児童が数人見られたが、新入児童自身で自立的に行えていた。多目的室への移動もこれまでに比べると静かにできた。集会時の姿勢もまだ各クラス1、2名の三角座りの乱れは見られたが、これまでより整っていた。これまで全体の活動に参加できないことの多かった男児は教員に付き添われ、立ち歩きはあるものの、活動に楽しそうに参加していた。児童全体では読み聞かせを楽しんで聞いている様子は

あるが、私語は例年より多く、クラスによって差も見られた。この日の集会終了時は教員が座る姿勢を確認させていた。

#### 4. 考察

今年度の特徴として、集会時の私語の多さと三角座りの姿勢の乱れが挙げられる。活動に興味、集中が必ずしも見られないわけではないが、活動時に感じたことなどを自己内に留めることなく発言してしまう傾向が多数見られ、また、これまでのように教員から徹底して静かになることが求められることも少なく、手遊びの利用などで課題に注目することは期待されていたが、発言が許されているようであった。廊下での移動時の発言も前年度までは教員からの制止がよく観察されたが、今年度は教員からの指導が観察されなかった。

そういった傾向のせい、一部の私語が周囲の児童に波及しやすかった。私語自体は毎年一部で見られたが、一部の児童が私語をしても周囲の児童がそれを注意したり、自分たちは私語しないようにしたりする傾向が前年度までに比べ弱まっていた。これは、そもそも児童全体が私語を行いやすい状態にあるのか、教員からの制止がすくない(故に児童にとって控えるべき行動とみなされない)のか、友だちに影響されやすい状態にあるのかはこの観察だけでは判断することはできない。しかし、授業中の他の児童の立ち歩きやふざけ、手悪さなどに気をとられ、授業に集中できない様子も一部で観察されたので、課題に集中し、注意をコントロールする力がこれまでの新入児童に比べると発達していない児童がいた可能性も考えられる。

読み聞かせボランティアによる手遊びの利用は前年度までにもよく行われていたが、今年度は教員からも手遊びやリズム遊びが導入された。児童は楽しんでしたが、リズム遊びはともかく、教員

による手遊びは「ゲーチャキパーで何作ろう」のような低年齢児向けのものであり、教員の手遊びについて知識はまだ十分でないように見受けられた。

三角座りの乱れについては列の後ろの児童に多く見られ、教室前方ではあまり見られなかったことから、身体能力の低下というよりは教員の目が届きにくいところで求められた姿勢を取り続ける意志が持続しない児童が増えたと推測される。教室後部には保護者サポーターは数人いたが、児童の背中側、視野の外に位置するためか、意識されなかったかもしれない。

遊具の使用順を待つときに列が乱れてしまう様子も観察されたので、姿勢や列を整えるという習慣の定着がこれまでより弱くなっているとも考えられる。遊具を使用したいという欲求に意識が集中し、待機時の自分の状態を意識したりコントロールしたりすることができないように見受けられる。これまでの新入児と比べると発達の幼い。

登校時や朝の支度の混乱は前年度までに比べて少なかった。しかし、これは今年度の新入児の能力が高いというよりも一学級あたりの児童数が比較的少なく、物理的環境として混雑が生じにくかったこと、また、学校側の経験の蓄積で持ち物の持たせ方が改善されたこと（上履きをランドセルに入れて持参する児童は今年度観察されなかった。これは保護者サポーターから再三、保護者に避けるよう伝達を依頼した事項である。）、そして、これは前年度からの傾向だが、6年生サポーター自身が入学時サポートを経験した年代となり積極的にサポートを行っていることなどが原因ではないかと考えられる。雨の日も少なく、あまり観察できなかったが、前年度までに比べると雨具の扱いに混乱は少なかった。この点に関しても事前の練習を学校と保護者に呼び掛けてきている。

入学直後よりも4月後半の方が友だち関係がで

き、おしゃべりのための立ち止まりなどが見られたのは例年通りの傾向である。

今年度初めて観察されたのは上級生である3年生のしゃがみ込みである。これが純粹に習慣の問題なのか、3年生になっても立ったままの靴の履き替えが困難な身体能力であるのかは、今回の観察だけでは判断できない。原因がバランス能力の未発達だとしても、習慣的な姿勢の乱れだとしても発達の望ましくない状況と思われる。

今年度は観察できた日数が少なかったせいか、身体の不調を訴えたりして、教員やサポーターの注意を引こうとする行動は少なかった。それでも、サポーターの付き添いを求めたり、気を引く行動をとったりする児童は数名観察された。

「学校へ行きたくない」という児童も4月終わりに少数だけ見られた。しかし、数や程度は例年に比べ多くはなかった。

また、数は少ないものの、教員やサポーターから期待されている行動を理解していてもそのために自分の欲求をコントロールしようとしないう児童が数名観察された。これまでの年度も活動に集中できない児童は観察されたが、今年度は少数ではあるが活動に参加しない意志が非常に明確に観察され、児童によっては保護者サポーターの支援では対応できなかった。

ごく一部の児童を除き、4月末には集団活動がスムーズに実施できる状態となった。しかし、例年に比べると私語の多い状態と教員から遠い位置での姿勢の崩れが残った。

教員の指導も遊び的な活動の利用が増え、スタートプログラムの考え方の変化を感じた。私語にしても姿勢にしても活動の節目にチェックを徹底するという従来の傾向がなくなり、緩やかであった。これが教員の意識的な方針の転換なのか、1年生担任の交代時の伝達不足によるものなのかは定かではない。

## 5. 全体的考察

A小学校にすこやかプランが導入され、7年が経過した。この間も、新入児童の状態は変化し、また、前述したように幼保小の接続の捉え方も変化した。

前年度まで、1年生担任教諭は教員やボランティアが話しているとき、廊下の移動時などには私語をしないことを新入児に活動の節目節目に求めている。しかし、今年度、手遊びなどで注目を集める試みが導入され、一方、「静かに」など明示的に私語の抑制を求めることはあまりなかった。姿勢の乱れについても前年度までは活動の始まりと終了時など姿勢を正す、静かになるまで待つということを徹底しようという姿勢が教員に見られたが、今年度は4月の終わりに姿勢を確認する様子が一度観察されたのみで、プラン実施時期の途中まで姿勢や私語のコントロールを新入児に求めることがほとんどなかった。これまで1名は前年度1年生担任が残留していたが、今年度は数年前の1年生担任経験者は配置されたものの、前年度担任は一人も残らず、前年度の1年生の指導方針が共有されにくかったと思われる。

また、近年、幼保小接続の捉え方は小1プロブレムを起さない、解決するという姿勢から、滑らかな接続を目指すようになってきている。小1プロブレム予防と解消のためにすこやかプランが導入された7年前には、おそらく、小学校の教育形態に新入児童を合わせるべく、禁止・抑制の方略が多用されていたものが、変化してきたのではないと思われる。静かにさせて活動を始めるのではなく、子どもたちが自発的に活動に興味を持ち、注意を払うべく援助し、また、それに伴う発言を受け入れる方向に指導が変化してきているのかもしれない。この傾向は去年頃から見られ、今年度特に顕著になった。例年、読み聞かせの様子は5月

以降も観察の機会を得られ、今年度も観察できた。去年度今年度は5月以降も読み聞かせ中の発言が多い傾向は見られたが、読み聞かせによく集中もしており、話の内容に沿った発言であった。

プロブレム対策から教育の接続へという全国的なシフトの影響がA小学校でも見えたわけだが、接続期のカリキュラムは小学校単独では完成せず、保育施設と双方で一貫したカリキュラムを作成することが本来必要である。しかし、特に都市部では保育施設は独自の保育方針を持つ数多くの私立園が存在し、進学する小学校とも一対一の対応ではないため、一貫したカリキュラムを幼保小連携して作成することは困難である。現在一貫したカリキュラムが作成できているのは主に自治体がリードした一部の公立園と公立小、また、大学の附属幼稚園と附属小学校である。

多数の私立園と連携せねばならないというA小学校の状況を考えると一貫したカリキュラムの作成は難しいが、それだけでなく、導入された手遊びが子どもの発達にあっていないことなどを考えても、A小学校がさらに就学前教育と入学時の児童の発達状態を研究し、スタートカリキュラムを工夫する必要があるだろう。

今年度観察された、遊びの中でのずるや、待機列の乱れなどは気にかかる現象である。また、少数ではあるが、授業課題などを理解しながらも自己の欲求を統制しようとしない児童が複数観察されたこともやはり気にかかる。2017年に告示された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として就学までの10の課題を提示した。その中に「道徳性・規範意識の芽生え」として、きまりを守ること、「自立心」として、しなければならないことを自覚することが挙げられている。無藤(2017)によればこの10の姿は達成義務ではなく、目指すべき目標として



の姿である。しかし、これらが幼児後期から就学時期課題となり、1年生の姿となることが望ましいが、同時に現在の1年生にとってなるのが決してたやすい姿ではないことが伺われる。到達していない姿が観察されたのは一部少数の児童だが、そのような児童に影響を受けて列全体が乱れたり、授業に集中できなかつたりする影響の受けやすさも今年度見られた新入学児の特徴であった。

幼保小の接続の在り方は全国的にも変化してきたし、A小学校でも、7年前のすこやかプランの導入時から現在まで変化してきた。A小学校ではこの7年間で、年度中の学級の再編成や担任のローテーションは淘汰された。これは学級内の児童の関係性を改善するためや、学年内でのチームティーチングのために採用されていたが、児童の不安感などマイナス面の方が大きかったため、とりやめられたと思われる。他方、大集団での集会と学年担任全体での指導、保護者と6年生によるサポートは新入学児の適応に効果があるとみられ、継続してきた。さらにスタートカリキュラムはより保育に沿う形に変化してきている。

いずれの小学校でも、保育施設でも、一貫したカリキュラムであれ、単独で作成したカリキュラムであれ、試行錯誤のさなかである。

また、入学する1年生の姿もこの7年間でさらに変化が見られた。そして、保育施設に入園する幼児の姿も変化してきており、10の姿の提起を受け、就学を一段と意識した保育が行われるようになるであろうし、育つ子どもの姿も変化し、それを受けてまた小学校のスタートカリキュラムも変化していこう。

まだまだ十分とは言えないだろうが、7年前に比して、保育施設と小学校の歩み寄りという連携は進んだと思われる。10の姿の提起により、さらに滑らかな接続が期待され、滑らかな接続は子どもたちの更に望ましい発達を導くことが期待され

る。

幼保小の接続ははまだ過渡期であり、これからも変化しながら続いていく。A小学校でもすこやかプランの実施は継続すると思われるが、残念ながら、筆者のサポーター参加は今年度までとなり、保護者サポーターの視点から見たすこやかプランの実施経過と成果については本稿が最終報告となる。

しかし、次年度以降も読み聞かせの部分を中心に学年集会の観察の予定はあるので、以後、集会での新入学児の様子を報告したいと思う。

## 6. 引用文献

- 学級経営研究会 (2000) 「学級経営をめぐる問題の現状とその対応：関係者間の信頼と連携による学級づくり：『学級経営の充実に関する調査研究』最終報告書」学級経営研究会
- 厚生労働省 (2017) 「保育所保育指針」
- 国立政策研究所 (2017) 「幼小接続期の育ち・学びと幼児教育に関する研究」報告書
- 新保真紀子 (2001) 「『小1プロブレム』に挑戦する」明治図書
- 高木友子 (2013) 「小1プロブレム対策を考える—保護者サポーターから見たS市すこやかプラン—」湘北紀要第34号 41-49
- 高木友子 (2014) 「小1プロブレム対策を考える2—保護者サポーターから見たS市すこやかプラン2—」湘北紀要第35号 85-92
- 高木友子 (2015) 「小1プロブレム対策を考える3—保護者サポーターから見たS市すこやかプラン3—」湘北紀要第36号 45-52
- 高木友子 (2016) 「小1プロブレム対策を考える4—保護者サポーターから見たS市すこやかプラン4—」湘北紀要第37号 85-94
- 高木友子 (2017) 「小1プロブレム対策を考える5—保護者サポーターから見たS市すこやかプラン5—」湘北紀要第38号 85-92

ラン 5—」湘北紀要第 38 号 51-61

東京学芸大学「小 1 プロブレム研究推進プロジェクト」(2010)「小 1 プロブレム研究推進プロジェクト 報告書」未公刊

東京都教育委員会 (2008)「東京都教育ビジョン(第 2 次)」

内閣府 (2017)「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」

無藤隆 (2017)「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』とは」保育ナビ第 8 巻第 8 号 10-21

文部科学省 (2017)「幼稚園教育要領」

## 謝辞

昨年度に引き続き、教育サポーターの活動に参加の機会を与えてくださった A 小学校の先生方、ならびに児童の皆さん、また、ともに活動した教育サポーターの皆さんに心より感謝申し上げます。

How to solve the First-grade problem 6  
— Thinking from a point of the Parent Supporter's view 6 —

Yuko TAKAKI

**【abstract】**

We have shifted the key point from the first-grade problem to the connection between kindergartens, nurseries, and elementary schools. It has been passed 7 years since A elementary school applied Sukoyaka plan in S city. The contents of the plan have changed as a result of the trials and the errors. In 2017 the meetings, the team teaching, and the supports by the parents and the 6th graders obtained a result. The teachers applied skills of preschool education. Some students sat in wrong position and did not participate in the class activities. The 10 ideals will make the preschool education, children, and the start curriculum better.

**【key words】**

connection between kindergartens, nurseries, and elementary schools, First-grade problem. 10 ideals.

